

非認知能力を育む上で大事にしたいこと

これから取り組みを始めようとしている園や保育者の皆さんへのアドバイスとして、非認知能力を支える幼児教育において大事にしたいことをお聞きました。

子どもの思いに寄り添って



子どもがやろうとしていることを一緒に面白がって見てみる。途中で失敗するかもしれないけれど、やろうとする気持ちを最後まで見てみる。失敗しても、「もう一回挑戦してみたい!」と思えるようなかわりをしたい。

写真提供：幼保連携型認定こども園あかみ幼稚園



育つ主体は子どもなので。非認知能力と一口に言っても、一人一人、その時の課題や育ちたい方向は違う。自分が教える側だという意識を取っ払って、子ども一人一人を尊重する。

写真提供：認定こども園ビノ

保育者自身の非認知能力を養う



上から眺めていたのでは、非認知能力は育てられない。どんなときも保育者の人間性が問われていくので、保育者自身が非認知能力を発揮できるかどうかということを自分自身に問うけることが必要。

写真提供：幼保連携型認定こども園福井成俊幼稚園



子どもたちに「主体的になりなさい」と言っても、保育者が主体的にならないと無理なので。保育者たち自身が「こういう保育がやりたい!」と思う保育をやってほしい。

写真提供：幼保連携型認定こども園出仲間こども園



先生が書いたカリキュラム通りにいかなかったときに、こうしてみようとする路線変更できる柔軟性をもてる。その路線変更が経験によってだんだんの中率高くなるから、最初のうちは間違ってもしょうがないよね。一つのことにとられすぎないでほしい。

写真提供：原町幼稚園



相手の話を素直に聞く。能力が高くて一人では社会は生きていけない。保育者同士、園の理念を共有して、子ども理解にもいろいろな理解があるから、「そうだね」ってお互いに意見を交換し合って、それを素直に吸収すること。

写真提供：幼保連携型認定こども園つるた乳幼児園

「その理解で合っている?」「大事なことは何か」考え学び続ける



これまで行ってきたことが絶対に正しいという思い込みを捨て、積み重ねてきたことも柔軟に見直すこと。そして、今までを否定されたように感じてしまう保育者の気持ちをどう受け止めていくかといった工夫も必要。

写真提供：やまざきゆめの森こども園



学び続けるということが大事。今、〇と思っているものも、何年後かには×になることもある。学び続けることで、それが分かることもある。

写真提供：和田幼稚園

本リーフレットは、文部科学省の令和3年度「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」として東京大学 Cedep が受託し実施した調査の一部をまとめたものであり、複製・転載・引用等には文部科学省の承認が必要です。

調査研究実行委員会代表：東京大学大学院教育学研究科教授 遠藤利彦
調査メンバー：東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター（Cedep）
西田季里・浜名真以・二村郁美・柳岡開地・利根川明子・野澤祥子



非認知能力



の育ちを支える 幼児教育



- 非認知能力：自己と社会性に関わる力、その基盤
- 今、注目される非認知能力
- 「非認知能力」という言葉、保育者はどう感じた？

取り組み事例

01 自己にかかわる心の力

取り組み事例

02 社会性にかかわる心の力

取り組み事例

03 非認知能力を支える基盤

- 非認知能力を育む上で大事にしたいこと

東京大学 Cedep
2021年度
文科省委託調査

非認知能力：自己と社会性にかかわる力、その基盤

非認知能力とは

「認知能力」は、読み書き計算など、「頭の良さ」や「IQ」で表現される心の力です。

それに対して「非認知能力」は、自分を大切にし、自分を高めようとする力、周りの人とうまくやっていく力、自分の感情をうまくコントロールする力など、「認知能力」以外の心の力のことを指します。認知能力と非認知能力は互いに影響を与え合いながら、一体となって育ちます。これらが育っている幼児の具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。

非認知能力の重要性

1960年代に行われた「ペリー就学前プロジェクト」という、貧困層家庭の就学前児を対象とした支援的介入（※注）の効果について、アメリカの経済学者 J. ヘックマンら（2013）による、追跡調査が行われました。その結果、介入を受けた群が介入を受けなかった群より、学力検査の成績、学歴、大人になってからの収入の多さ、持ち家率の高さ、逮捕者率の低さといった様々な面で上回っていたことが分かりました。一方で、二つの群の IQ は、介入終了後 4 年経つと差が消えていました。そのため、二つの群の大人になってからの差を生み出したのは認知能力以外の力、すなわち非認知能力だと考えられるようになりました。

その後、OECD レポート（2015）でも、社会情緒的スキルが身体および精神的健康、ウェルビーイングの高さ、問題行動の少なさを予測すると示され、認知能力ではないもの（=非認知能力）への重要性がますます注目されてきています。

※注：午前中 2 時間半の子どもの自発性を尊重した幼児教育と、週に一度の家庭訪問を組み合わせた 30 週間の介入



（引用文献）
Heckman, J., Pinto, R., & Savelyev, P. (2013). Understanding the mechanisms through which an influential early childhood program boosted adult outcomes. American Economic Review, 103 (6), 2052-2086.
OECD (2015). Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills: OECD Skills Studies. OECD Publishing.
遠藤利彦（編）（2017）. 平成 27 年度国立教育政策研究所プロジェクト研究報告書「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」.

非認知能力の育ちを支える取り組み：3つの分類での整理

遠藤ら（2017）は、非認知能力に含まれる諸々の心の力を、自己／他者、ないしは自己／他者／他者関係に分けて整理しています。本調査では、それに基づき、子どもの非認知能力の育ちを支える園での取り組みを、それが意図する非認知能力によって自己／社会性（他者および他者関係）に分け、さらに非認知能力を支える基盤作りを加えて 3 分類（「自己にかかわる力」「社会性にかかわる力」「非認知能力を支える基盤」）で整理することとしました。「自己にかかわる力」とは、ものごとに対する興味や自信など、自分を大切にし自分を高めようとする力を指します。「社会性にかかわる力」とは、協同性や思いやりなど、周りの人とうまくやっていく力を指します。そして、「非認知能力を支える基盤」とは、アタッチメント（愛着）や園の風土など、非認知能力の発達を支える基盤となる関係性や取り組みを指します。

今、注目される非認知能力

2020 年度 Cedep「乳幼児期の非認知能力についての意識および取り組みに関する調査」（幼稚園、保育所、認定こども園などの園対象調査および、保護者対象調査）※で明らかになったことをご紹介します。

（有効回答数：園対象調査 409、保護者対象調査 1683）

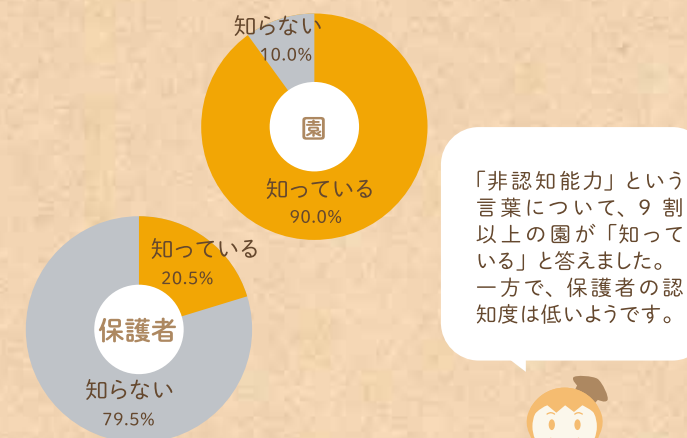
※上記調査の概要および結果の速報は Cedep の以下のサイトで公開されています。

www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects_ongoing/research/toppan/



園の「非認知能力」の認知度は非常に高い

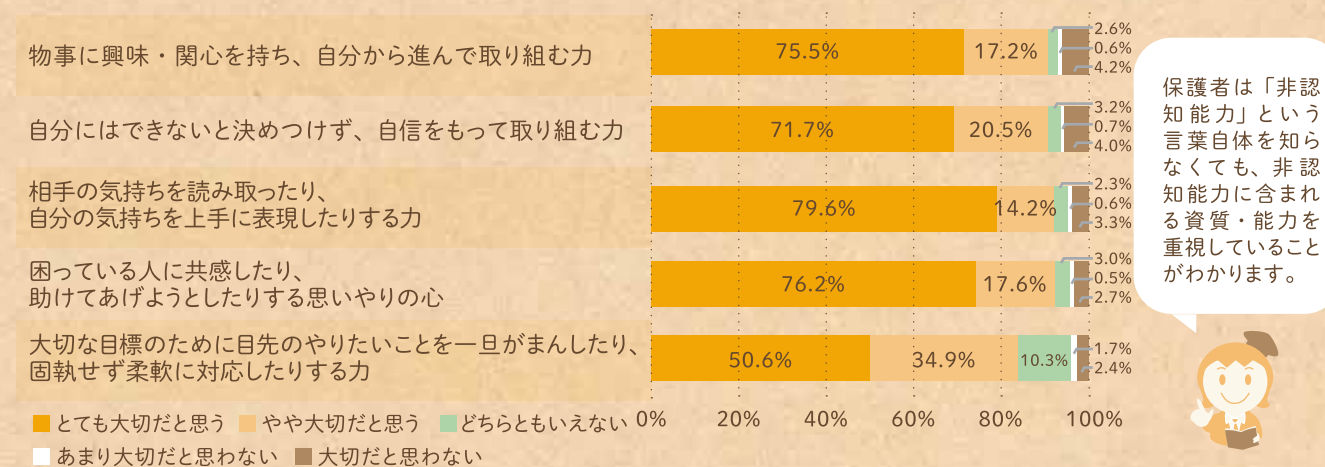
「非認知能力」という言葉について



「非認知能力」という言葉について、9 割以上の園が「知っている」と答えました。一方で、保護者の認知度は低いようです。



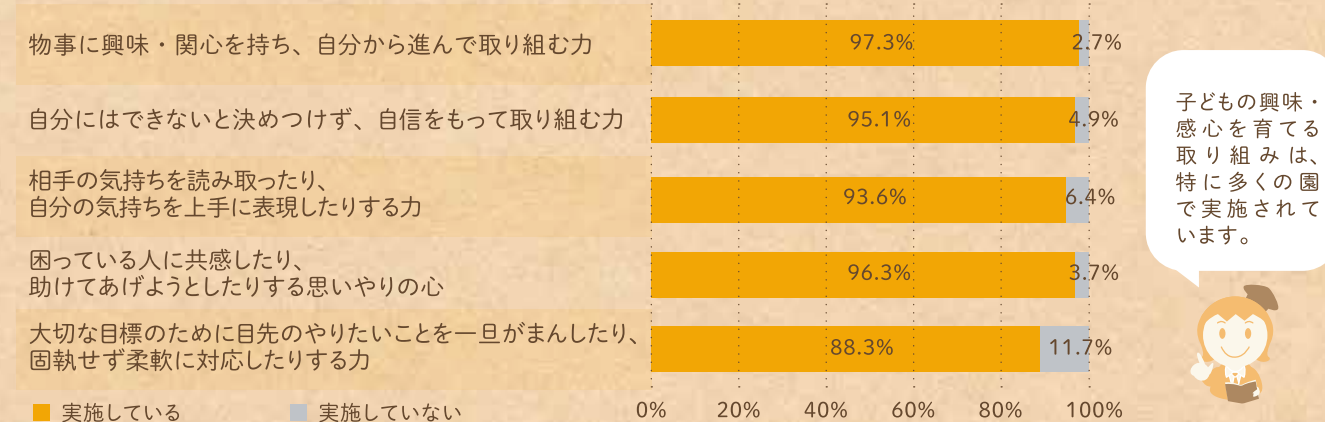
保護者も、「非認知能力」に含まれる資質・能力を重視している



保護者は「非認知能力」という言葉自体を知らなくても、非認知能力に含まれる資質・能力を重視していることがわかります。



9 割前後の園で、非認知能力に含まれる資質・能力を育む取り組みが実施されている



子どもの興味・感心を育てる取り組みは、特に多くの園で実施されています。



上記 2020 年度調査では、非認知能力を育む取り組みの、具体的な内容や効果は未検討だったため、本調査では、それらを明らかにするためのヒアリング調査を行うこととしました。

調査の概要

1 園長・副園長・主任保育者へのヒアリング調査

幼稚園・認定こども園で実施されている非認知能力に関する取り組みについての知見を収集するため、ヒアリング調査を行いました。

対象者 2020年度 Cedep「非認知能力についての意識および取り組みに関する調査」(web アンケート：園調査)にご回答いただいた幼稚園・認定こども園 29 園の、園長・副園長もしくは主幹保育者

調査期間 令和3年5月～6月

ヒアリング内容 「非認知能力」という言葉に対し感じたこと、園での非認知能力に関する取り組みの内容、非認知能力を育む幼児教育において大切にしたいこと

園での非認知能力に関する取り組みについて

調査で得られた取り組みを、取り組みのねらい(意図する非認知能力やその基盤)によって、「自己にかかわる力」「社会性にかかわる力」「非認知能力を支える基盤」の3つに分類しました。

※意図する非認知能力もしくはその基盤の呼称は、ヒアリングの語りから抽出しました。

このリーフレットでは、ヒアリング調査の結果を中心にをご紹介します。

2 子どもの観察調査

園の取り組みが子どもの姿にどのように影響しているのかを知るため、園に訪問して観察調査を行いました。

対象者 認定こども園2園の年長クラス児

調査期間 令和3年7月と12月の2時点

このリーフレットとは別に、78の取り組みをご紹介します。取り組み事例集も作成しました。ぜひご参照ください。



「非認知能力」という言葉、保育者はどう感じた？

「非認知能力」という言葉に対して、率直にどう感じたのかを尋ねました。

やってきたことは間違いじゃなかった！と自信につながった

10年前から心の部分を大事にする保育をしてきましたが、当時はどちらかというと見た目重視の、かっこよく運動会でお遊戯しているとか、大人が喜ぶ保育が一般的でした。非認知能力という言葉が出てきて、いろいろな研究結果が発表されて、「私たちが大切にしてきたことは間違っていない」と自信につながりました。

保護者の理解を得やすくなった

今までは保護者の方から、「文字や数を教えてほしい」とか、「ピアノやバイオリンを教える時間を、教育時間以降に作ってほしい」とか、そういう要望もあったのですが、「非認知能力が大切なんだよ」とクローズアップされたことによって、私たちの保育について「そうなんだですね」と賛同を受けることが多くなっている気がします。

より広い社会の理解や連携が進むことを期待

もともと保育で育てているのは、目では見えない、数値化できないもの。そこに改めて非認知能力という名前がついた感じがですね。名前がつくというのは大きなことで、専門職でないと分からない感覚的なものを、感覚的に発信するのではなくて、今はエビデンスとか言われますから、しっかり名前がついたことは助けになるのではないかと思います。

次ページからは、「自己にかかわる力」「社会性にかかわる力」「非認知能力を支える基盤」の3つの分類ごとに、園での取り組みの一部をご紹介します。

01 自己にかかわる心の力

・興味 ・感受性 ・自信

「自己にかかわる力」とは、興味や自信など、自分を大切にし、自己を高めようとする力を指します。ここでは、その中の一つの側面である、興味を育む園の取り組みについて紹介します。



写真・資料提供：幼保連携型認定こども園赤城育心こども園



・興味 を育む取り組み 子どもの興味に寄り添う～種を数えた一年間

赤城育心こども園では、子どもたちが主体性を持って「やってみたい!」と感じる遊びができるように、一人一人の興味や思いに合わせた環境の構成をしています。子どもが興味を示したことにに対し保育者は、教えるのではなく、遊びを発展させる中で「これはこうなっているのか」といった気づきをうまく伝えていくことを心がけています。ある日、5歳児の一人が園の畑でとれたピーマンの種に興味を持って数え始めました。それをきっかけに、他の子も加わり、かぼちゃ、すいか、きゅうりなど様々な野菜や果物の種を数える活動に発展していきました。園児が種をテープで紙に貼って数え、それを職員が写真で撮ってデータで保管しました(写真右)。種を数えたい子どもには数えられる環境を保育者がつくるようにしたところ、一年間ずっと続けた子どももいました。

保育者が感じた取り組みの効果

種のエピソードでは、種を数える中で子ども自身に多くの気づきがありました。「これとこれがまると10になる、100になる」という法則への気づきや、「リンゴは種が少ないだろう」といった植物の特徴への気づきなど、非認知能力と認知能力が共に育っている様子が見られました。

これまでの取り組みの中で、遊びを発見したり、遊び込んだりする力が育っていると感じます。園外保育で牧場に行ったとき、転園してきたばかりの5歳児が「ボール持ってくればよかった。何して遊んだらいいの?」と言いました。すると他の5歳児たちが「なんでも遊べるんだよ!」「葉っぱでも遊べるし、寝転がっても気持ちいいんだよ」と声をかけ、思い思いに遊んでいました。

観察調査でみられた子どもの様子

子ども一人一人が自分のやりたいことを、やりたい時にやり続けられる場所と時間がたっぷりあるという確信をもつことができ、そのことが遊びの深まりと広がりを後押ししているようです。仲間や先生も巻き込んで、遊び込む子どもの様子が見られました。保育者は、子どもを手助けする黒子役に徹しながらも、困った時には頼ることができる安全基地として遊びの発展を支えていました。

日常のちょっとした意識が非認知能力を育む

他の園の工夫

・感受性 を育む自然体験

身近なものや五感を通してかかわる。地域の自然(雪遊び、米作り)を感じたり、給食の匂いをかいだり、カッパを着て外に出て雨を感じたり、泥で遊んだりといったことを積極的に行っている。

・自信 を育む声かけ

褒め上手になる。例えば、跳び箱で余裕で飛べる段で挑戦を止めてしまう子がいると「もう一段いけるよ!」と挑戦してみようという気持ちを引き出す声掛けを心がけている。

02 社会性にかかわる心の力

・ 協同性 ・ 思いやり ・ 社会とのかかわり

「社会性にかかわる力」とは、協同性や思いやりなど、周りの人とうまくやっていく力を指します。ここでは、その中の一つの側面である、協同性を育む園の取り組みについて紹介します。



写真提供：認定こども園ピノ

←じゃがいもパーティーのための収穫
↓じゃがいもパーティーの準備



・ 協同性 を育む取り組み 年長児のパーティ企画

認定こども園ピノでは、調整する力や、人とのかかわる力の育ちを意図して、活動の準備・話し合いから子どもが主体となって取り組む活動を、5歳児クラスに取り入れています。例えば 6 月には、自分たちが育てたじゃがいもを使ったパーティがあります。4歳児クラスの2月に種芋を植え、年長になった収穫間近の 5 月から、パーティで「何を作るか」「どんなことをしたいか」「だれを呼びたいか」といった話し合いを、子どもたちが主体となって行っています。その他にも年間を通して、子ども主体の企画や話し合いがいろいろな場面で行われます。子どもが協同して行うような表現活動や異年齢での活動で、普段は引込み思案な子をあえてリーダーにすることもあります。また、年度の最後には保護者を招待してのひなぎくパーティを行っています。

保育者が感じた取り組みの効果

最初は、保育者が話し合いに加わってある程度調整する必要があったのですが、最後は保育者がいなくても、子どもだけで話し合いが成立するようになりました。

※観察調査対象園ではないため、「観察調査でみられた子どもの様子」は割愛しました。

話し合いを通して、「そんな意見もあるね」と他の子の考えを取り入れる視野の広さや、みんなでより良いものを作っていくという意欲が、どんどん育っていると感じています。

園には、友だちや社会に目を向けるきっかけがいっぱい！
他の園の工夫

・思いやり を育む 異年齢での関わり

3・4・5歳は異年齢保育にして、年下の子どもへの思いやりの気持ちをもったり、年上の子どもを見て「自分もやりたい」と思ったりしやすい環境をつくっている。子どもだけでなく、保育者間の助け合いも増えた。

・思いやり を育む 気持ちのやりとり

年上の子どもが年下の子どもをよく助けるけれど、年下の子どもは自分でやりたいときもある。そうした気持ちを伝えたり、理解したりするやりとりを体験させるように心がけている。

・社会とのかかわり に気づく SDGs

SDGsに取り組んでいる。たい肥づくりや、ビニール袋を過剰に使わない生活を肌で感じて、自然を大事にしたりとか、自分たちだけのものではないんだという感覚が育っていけばよいと思う。

03 非認知能力を支える基盤

・ アタッチメント ・ 風土づくり ・ 記録

「非認知能力を支える基盤」とは、アタッチメント（愛着※注）や園の風土など、非認知能力の発達を支える基盤となる関係性や取り組みのことです。ここでは、その中の一つの側面である、子どもと保育者とのアタッチメントを育む園の取り組みについて紹介します。



写真提供：幼保連携型認定太田和こども園

※注：不安や寂しさなど、子どもの感情が崩れたときに信頼できる大人に近づき安心感を得ること、およびそうした安心感を感じられる大人との結びつき。安心できる関係の中でこそ、非認知能力をはじめとする子どもの心の力は大きく育つことができると考えられています。



・ アタッチメント に関する取り組み 園と家庭で子どもが安心できる、関係づくり

太田和こども園では、子どもたちがつらいことや困ったことを言葉にできるように関係を築くことを重視しています。保育者は急き立てるのではなくそっと寄り添って「困ってるの?」「つらいの?」「何か言いたいことあるのかな」といった言葉を子どもにかけようとしています。乳児に対しては担当制を取っています。担当制をとること、子どもは誰に甘えたらよいかわかりやすくなり、保育者も、子どもの甘えをしっかり受け止めて気持ちに寄り添う保育が行いやすくなると考えています。また、家庭でのアタッチメントの形成も重要と考え妊娠中や出産直後の保護者を対象とした『にこにこカンガルー講座』と、それ以降の保護者を対象とした『すくすく育児講座』を一年に2回行っています。

保育者が感じた取り組みの効果

子どもの不安な様子がなくなり、安心して園で生活できていると感じます。また、園からの発信を定期的に行うことで、保護者がそれを受けとめる関係ができ、伝えやすくなりました。

観察調査でみられた子どもの様子

保育者にしっかり甘えて育ち、安心感があるからでしょうか、年長児は仲間同士のやりとりが中心になり、保育者は全体を見守る立ち位置をとっています。うんていのゴールで保育者にハグするなど、保育者とのスキンシップを楽しむ様子もみられました。いざこざ場面でも激しく泣いたり怒鳴ったりはせず、自分の意見を友達に主張しながら、子どもだけで自立して解決する様子が見られました。

基盤は一日にしてならず。
地道な取り組みを
続ける園の努力あってこそ
他の園の工夫

保育の質につながる・風土づくり

何気ない瞬間に見つけた子どもの姿を付箋に書いて貼って共有する「だったよ表」を事務室に作り、保育者同士が子どもや保育のことを語りたいと思える風土づくりを大切にしてきた。

保育の質向上のための・記録

「ドキュメンテーション」に子どもも保育者も取り組んでいる。子どもは花壇を作るプロジェクトをやりながら、花の種類や名前、何を植えるかを調べ「こんなのがあったよ」と自分たちの言葉で発表していく。保育者はそれをどう支えていって子どもたちからどういうものを引き出すことができたかというプロセスを記述する。